

星屑の狭間で

トーマス・ライカー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超高密度で超高速で、高度に複合的・複層的に発達して展開し、定着している超高レベルのデータストリーム・ネットワークである、未来社会。

総合商社で営業係長として勤務する、アドル・エルク。

データストリーム・ネットワーク・メディアが、超大規模なバーチャル体感サバイバル宇宙空間艦対戦ゲーム大会を企画し、ネットメディアのバラエティー配信番組として開始するとした。

そして、一般市民から各種戦闘艦の艦長役として募集する事になり、アドル・エルクはそれに応募して当選した。

男性艦長の場合、その艦のクルーは全員、その艦長が選抜した女性芸能人が配属され、女性艦長の場合、その艦のクルーは全員、その艦長が選抜した男性芸能人が配属される。

クルーの個室の中は録画されないが、作戦行動中は勿論、それ以外の艦内は総て録画され、編集されてバラエティー番組の中で放映される。

アドル・エルクは軽巡洋艦の艦長となり、女性芸能人の中から彼の艦のクルーを選抜して配属させる。

彼の軽巡洋艦『デイファイアント』は、このバーチャル体感戦闘サバイバルゲームを、彼が選んだクルーと共に、どう戦い抜くのか？

目次

まさか当選?!	1
記者会見・・・承前	12
記者会見	20
記者会見後の昼食会とその後・・・	25

まさか当選?!

星層の狭間で・・・

私の名はアドル・エルク。

比較的に大きいと言われる企業に勤める38才のサラリーマンだ。

妻と娘が一人いる。

この時代は超高度に統合された有線・無線のデータストリーム・ネットワークが複層して複合的にほぼ全世界を網羅する世界だ。

市民の娯楽・情報取得・政治、経済活動への参加・学業・仕事・研究・趣味・余暇活動も、その殆どがこのデータストリーム・ネットワークに依拠している。

一方向のみの放送メディア・システムは、その殆どが全廃されて双方向重合複層メディア・システムに、取って代わった。

更に、データストリーム処理システムの技術は、アイソリニア・チップ、アイソリニア・ロッドの集積率が極度に上昇したのを受けて、処理システムそのものの超小型化・処理速度の超高速化・複合複層同時処理方式の超高速化が、瞬く間に急進した。

データの表示システムに於いても、多方向からの視聴にも適応し、超高密度・超高画素数にも到達した3D立体投影システムが実用化されてはいるが、それはまだ個人の個室や家庭内や地域の公共施設や企業や研究機関の室内等での比較的に限られた空間の中で利用するぐらいのシステムに留まっている。

それでもバーチャルな体感システムは、世界のどこにいても、世界中の誰とでも、自由に、いつでも、同じバーチャル体感ソフトウェアを使用する事が出来る様になってはいた。

この状況が、ゲーム市場にビッグ・バンを引き起こしたのは言うまでも無い。

様々な種類のバーチャル体感システムでの、ゲームソフトが研究・開発・製作・販売され、ユーザーに使用されるようになった。

言うまでも無く、データストリーム・ネットワーク・メディアも、

バーチャル体感システムでの様々なゲームを使用した番組を立ち上げ、それらは概ね好評を博していた。

それらの中の一つに、サバイバルタイプの宇宙空間戦闘に、戦闘艦を操艦して参加し、勝ち抜いていく、視聴者参加型のバラエティー・ゲーム大会を企画した番組があり、私もその大会に参加するべく応募して、なんと当選してしまったのだった。

私が応募したのは、バーチャル体感システムメーカー、データストリーム・ゲームソフトメーカー、データストリーム・ネットワーク・メディアら数社で共催される、『サバイバル・スペースバトルシップ』と言う大会だ。

その大会を共催する形で参加している、データストリーム・ネットワーク・メディアが企画した番組は、ゲームに参加する戦闘艦艇の艦長として、一般人の男女を10名ずつ募集し、男性の一般人艦長には女性の芸能人を指揮させ、女性の一般人艦長には男性の芸能人を指揮させて、それぞれにこのゲーム大会に参加してもらい、その指揮ぶりや戦いぶり、ゲームに参加中の艦内の様子をそのまま収録してバラエティー番組の中で流すと言うものである。

メールで当選の通知が来た日の夕方に電話が掛かって来た。1月25日だった。

話した相手は女性でもう名前は忘れたが、その番組のセカンドディレクターの一人だった。

番組のプロデューサーやディレクター等との顔合わせと基本的な打ち合わせとともに、撮影セットの説明をしたので何時が良いかとの事だったので、次の土曜日の朝に私がそちらに出向くと言う事で合意した。

次いでにクルーとなるメンバーの人選が出来るのかと訊いたところ、500人程度のリストを送るから選んでおいて欲しいと言われたので、二つだけ、35才以上の人はリストに含めないで欲しいと言う事と、クルーの人事と艦内配置については艦長と艦の司令部に任せて欲しいと注文を付けたが、快諾してくれた。

番組の予告編にも使用するPVを作製するので、私の個人情報を公

開させて欲しいと言われたが、顔と名前と年齢だけを許可した。

選ばれた他の艦長達と顔を合わせる事があるのかと訊いたら、番組制作発表イベントが行われるので来て欲しいとの事だった。

そこでは併せてPVの撮影やら記者会見やらインタビューやら全体説明会も行われると聞かされた。

一両日中にクルー候補となる女性芸能人のリストをメールで送ると言う事まで聞いて電話を切った。

さすがに注目度の高い新番組だし、今も盛んに宣伝されている大会でもあるので、これ位の事は当然なのだろう。この大会に出場出来る事に対しての喜びよりも、これから自分の身边が慌ただしくなる事への憂鬱の方が少し優っていた。

そしてそれはすぐ現実になった。

電話を切ってから30分後に配信されたネットニュースで、選ばれた20人の一般人艦長がもう発表されたのだ。

その全員が顔・名前・年齢ともに公表されていた。おそらく最低限の公表範囲として要求されたのだろう。

改めてこれから大変になるなと思いつつながら、選ばれた20人についての事を手許の携帯端末にメモとして書き込み始めた。

年齢だけでは、未婚・既婚は判別できないが、艦長として選ばれたこの人達の年代は、30代から50代に渡っている。20代と60代の人はいなかった。

その顔付きと表情からは、性格を読み取る事はできなかったが、充分に高い知性と強い意志を感じさせるものだった。

ネットニュースのデータをダウンロードして、それぞれについての印象を書き込み始めてから、5人目についての印象を書き込み始めたところで電話が来た。

電話の相手は、職場の同僚で後輩のグラハム・スコットだった。

『もしもし先輩？すごいじゃないですか！よく選ばれましたね。おめでとございます。頑張ってください。応援してますから』

『まだ選ばれただけなんだから、あまり騒がないでくれよ』

『何言ってるんですか。倍率五億倍以上ですよ。それを突破しただけ

でも、超すごいですよ』

『お前が知ってるって事は、フロアの皆ももう知ってるかな?』

『そんなレベルじゃないですよ。ニュースで流れてからもうメールが引つ切り無しで返事もできません。先輩のところもすごいんじゃないんですか? おまけにさつきはファーストチーフから電話が来て、お前ちよつと電話して様子を訊いてみるって言うからこうして…』

『ファーストチーフが!? それじゃ明日入社したらヤバイかな?』

『会社としても、もう動いていますよ。特に宣伝部がね…』

『宣伝部が? オイ待てよ。まさか俺に番組内で社のPRをさせようって言うんじゃないだろうな? そんな事をやらされるんだったら、俺は辞退するぜ…』

『そこまでは言わないでしょうけど、何かの話はありますね…』

『まさかこんなに早く知れ渡るとはな…』

『まあ、覚悟してやるしか無いですね。番組収録のスケジュールによつては、会社としても出来るだけ都合を付ける方針みたいですから…』

『もうそんな話まで出ているのか?…分かったよ。色々スマンな』

『これくらい、どうって事はないですよ。それより羨ましいですね。クルーを女性芸能人から選べるんですから…』

『それが結構難題だと思うな…キャラクターはともかく、素の性格は分からないからな…』

『上が何を言つて来るかも気掛かりですけど、皆のやつかみも結構キツイと思いますよ。先輩は女性社員に人気があるから…』

『まあ会社の方は何とかするさ。これからも何か聞いたら頼むよ』

『分かりました。僕で良ければ、いつでも訊いて下さい。それじゃ明日会社で…』

『…ああ、また明日な…あつ、ファーストチーフに電話するのか?』

『ご心配なく、適当に言つて置きますから…』

『済まないな…宜しく頼む…それじゃお休み…』

『お休みなさい…明日、始業の前に電話します』

『分かった、それじゃ…』

電話を切つて未読メールを調べてみると、もう1200件を超えていた。

思わず溜息を吐くと、コーヒーを淹れに立った。

同じ会社に勤めている人間を同僚と他部所の者としてグループ分けし、ネットワークの中での友人達を、交流のある者となない者となしグループ分けした。

大体の返信内容のパターンを6種類ほど用意して、結構時間は掛かったがコピペで総て返信した。

残ったメールは大会の運営本部からのもので、添付されていたファイルには女性芸能人500名のリストがあった。

早速プリントアウトして眼を通し始めたが、ふと時計を見るともう9時を廻っていた。

ファイルをデスクに置いて席を立ち、シャワーを浴びて食事を済ませるまでに、1時間ほど掛かったのでファイルは明日に廻す事にして、自宅に電話を入れた。

二ヶ月前までは、自宅から通える距離に職場があったのだが、勤務する部署の移動により、通勤できない距離となったので、それ以来1人用の社宅マンションに住んでいる。

当然だったが、家族も私が当選した事は知っていた。

あまり非難がましい事は言われなかったが、相談して欲しかったとは言われた。明日から色々大変になるだろうから、身体には気を付けるようにと言われて通話を終えた。

ファイルに一瞥は投げたが手には取らずに明日の準備を済ませると、通勤用のバッグにファイルを入れた。昼休みにでも眼を通すか…。

着替えてベッドに入る前にもう一度メールをチェックしたら、未読メールが5000件を超えていた。

『倍率五億倍以上…か』

もう完全に諦めて総てを落として寝た。

1月26日は火曜日だった。いつもより30分程早く眼が覚めた。

私にとつての平日がいつも通りに動き出す。

顔を洗つて着替え、コーヒーを淹れて朝食の用意をしながら、いつもなら仕事上の連絡が無いか確かめるために端末を起動させるのだが、mailBOXを見るのに躊躇していたのでどうしようかと思つたが、見ることにした。

未読メールは8500件程になっていた。

思ったよりは増えていなかったが、ざっと見ると知らない人間からのメールが30件程届いていた。

内容はそのどれもが、様々なニュースメディアからの取材の申し込みだった。これは私のアドレスがニュースメディアにリークされたという事だ。

私は軽く舌打ちしてコーヒーを飲み干すと、業務に関連したメッセージが無い事を確認して端末を落とした。

身仕度を調べ、バッグを取つて外に出た。今にも雨が降りそうな曇り空だ。会社から支給された通勤用のエレカーをスタートさせると、グラハム・スコットをコールした。

『ああ、スコットか？ おはよう、……うん、今出たよ。どうも俺のアドレスを誰かがリークしたらしい。……うん、まだ今来ているのは、ニュースメディア各社からの取材申し込みだけだな……参ったな……とにかくアドレスは変えるよ……出社したらすぐファーストチーフに話をするから……ああ、分かった……じゃ、また後でな……』

通話を切つてから、約15分で私はエレカーを職場の駐車場に滑り込ませた。

私は一階のホールフロアを通り抜けると左に折れてキャフェテリアに入った。まだ始業には時間があるので、コーヒーを飲みながらいつもここで一服している。

自分でコーヒーを淹れて席に着くまでの間に17、8人の同僚から声を掛けられた。一応一人一人に挨拶して謝意を述べ、話を切り上げて席に着くまでにたっぷり20分は掛かった。

席に着くとほぼ同時にグラハム・スコットとファーストチーフのエリック・カンドルが入つて来た。

『おはようございます、チーフ…』

言いながら席を立とうとする私を左手を軽く挙げて制して、2人も向かいの席に着いた。

『スコットから聞いたよ。まずは、おめでどうと言わせてくれ』

いつものにこやかな笑顔で言った。

『ありがとうございます』

『取材の申し込みは何社から来てる？』

『今朝の時点では18社からでしたが、今は判りません』

『そうか…人事と営業本部に話を通して、1時間以内に君のワークアドレスは変更させる…君は一切応えるな。無視して良い…実は社にも問い合わせやら取材の申し込みがもう数件来ていてな…』 『すみません』

『謝る必要はないよ…社へのアプローチには広報が対応するから心配ない…パーソナルアドレスには来てるのか？』

『そちらにはまだ…』

『うん…まあ時間の問題だな…そっちは君に任せるが、早く変えた方が良いな…』

『そうするつもりです』

『朝イチで片付ける仕事はあるのか？』

『さほど急ぐものはありませんが…』

『ならばばらくスコットに任せて付き合ってくれ…人事と営業と宣伝と広報の連中が話したいそうだな…』

『分かりました』

『じゃ、30分後に5階の応接ラウンジでな…』

『はい、では後ほど…』

そう言っって席を立つと、エリック・カンドルは出て行った。

やっとコーヒーに口を付けて煙草を啜えた。

『やっぱりかなり慌ただしくなって来ましたね』

スコットも自宅で淹れて持って来たコーヒーをカップに注ぎながら言う。

『ああ…先が思い遣られるな…』

『これからもっと大変になりますから、覚悟して置かないと保ちませんよ』

『解ってるよ…なあ、俺はオフィスには入らないからデスクにある赤いワークファイルを見て早い順に取り掛かってくれないか…？急ぎのものはないから…』

『解ってます…何の話でしょうね？』

『さあな…どっちにしろ聞くしかないんだろうな…ほら、後2分だぞ』

『了解、それじゃあ、また後で…』

グラハム・スコットも立ち上がり、ぶらぶらと出て行った。殆ど人がいなくなつたキャフェテリアの中で、私はコーヒーを飲みながら煙草を燻らせている。

女性芸能人リストファイルの事が頭を掠めたが、バッグから出す気にはなれなかつた。

そのままコーヒー一杯を飲みながら煙草を2本喫つて、バッグを手に席を立つた。エレベーターに乗つて5階で降りる。

応接ラウンジは左手にある。キャフェテリアよりは狭いが四つに仕切られたボックスシートになっている。

入り口から近いボックスに入り更に近い席に座る。

何か飲み物でも取りに行こうかと思ひ掛けたが、数人の脚音が聞こえたので諦めて座り直した。

それから5秒程して、『おつ、ここだったか』と、先程のエリック・カンドルが右手を挙げながら入つて来た。

続けて4人の男が、彼に従つて入つた。

4人とも面識は無い。私は立ち上がつて彼等と握手を交わした。

『紹介しよう、人事部のザーヒル・タニン、営業本部のイスマイル・ガスパール、宣伝部のアグシン・メーディエフ、広報部のマスード・カーンだ』

『宜しく願ひします』

6人で座るとテーブルも小さく感じる。

『色々あるから早速始めよう。先ず君の新しいワークアドレスだが、これだ』

そう言つて小さいソリッドメディアを胸ポケットからつまみ出すと、私に手渡した。

『人事と営業でも承認済みのものだ。戻つたらすぐに替えてくれ』
『分かりました』

『そのアドレス宛にも外部の無関係者からメールが来たら、報告して下さい』と、人事のタニーン氏が補足した。

『了解しました』

『それで……あまり個人的な事に立ち入るつもりはないんだが……実際どこまで話が進んでいるんだ？』と、エリック。

『今週の土曜日に……30日ですが、私が局に行つて番組のプロデューサーやらディレクター等と、顔合わせや打合せをしながら、撮影セットの見学をさせて貰える事になっています』

『チーフプロデューサーが来るのかな？』と、営業本部のガスパール氏。

『そこまでは聞いていませんが……』

『番組の制作発表会の話がありましたか？』と、広報部のカーン氏。

『はい、制作発表会には出席して欲しいと言われましたが、日程は聞いていません』

『うん……その土曜日の打合せの時に言われるんだろうな……』と、エリック。

『労務管理としても言えることは、例えば番組の収録が平日であつたとしても、直行直帰の出張扱いにしますから心配しないで下さい。日当・手当も出しますから……勿論休日に行われるなら、収録が終るまで時間外勤務扱いにします……』と、人事のタニーン氏。

『はい……』

『職場にニュースメディアからの通話が入つて来るかもしれないませんが、貴方は一切応えないで直ぐに広報部に転送して下さい。社に掛かつて来る取材の申し込みに付いても、広報部で対応します』と、再びカーン氏。

『分かりました。…それで、もし勤務中の私を取材したいと言ってきたらどうしますか?』

『状況によっては…許可を出す場合もある、と言う事ですね、今は…』

『そうですか…』

『まだ流動的な部分もあるでしょうが、こちらからお願いしたいのは、これから始まる向こうとの話し合いや交渉の内容は、細大漏らさずに報告して欲しいと言う事です』と、タニーン氏。

『それは…了解しました』

『ご心配でしょうからお話しますが、宣伝部としてはまだ何も決まっています。ですが間違ってもエルクさんに社の商品のPRを番組の中でやって貰おうなんて言う事はありませんから、安心して下さい』と、メーデーエフ氏。

『逆に言えばそんなのは浅ましいし逆効果だな。それよりアドル・エルクが指揮する艦が勝ち進めば、それだけで大いなるPRになると思うがね』

と、エリック・カンドルが後を引き取って言った。

静かだが力強い肯定の空気が流れる。

『…それで、他にあるかな?…今話しておくべきことは…』

エリックが見回すようにして促したが、誰も口を開かなかつたので…

『艦のクルーは向こうが決めるのか?』

『いえ、500人のリストから私が選びます』

『解った。じゃあ今日はここまでにしよう。いつでも連絡して何でも相談してくれ。応援するから…』

そう言って立ち上がった。

『ありがとうございます』と応じて私も立つと、皆も立ち上がり口々に激励の言葉を言いながら私に連絡先のデータも入っているメディアカードをくれた。

エレベーターに乗り込んでからエリックが、『上には俺達が適当に言うって置くから心配するな…君は周りから何を言われても、受け流し

ていれば良いから…』

『分かりました』『それじゃあな…』

エリック等と別れてエレベーターから降り、自分が働いているワークフロアに入って行くと、同僚達から次々と握手を求められた。

言葉はあまり無い。あつても『おめでとう』とか『応援してるよ』とか『がんばって』ぐらいだが、笑顔で手を握り、軽くハグを交わすだけでも結構感動するものだ。

40人程から祝福や激励を受ける頃には、少し涙ぐんでいた。

自分のデスクに目を向けると、スコットが立ち上がってこちらに笑顔を向けている。

記者会見・・・承前

『どうでした・・・?』

『社としての対応で新しく決まったことはまだないよ・・・これから始まる向こうとの打ち合せの中で、指示や要望の中身が分かればそれに基づいて対応を決めるってさ・・・』

『そう言いながらソリッド・メディアを取り出してスコットに渡す。』

『新しいワーク・アドレスだとき・・・置換して、関係している各部署とこれまでの取引相手に変更通知を送ってくれるか?・・・それと、このアドレスもアドレス・ボックスに入れて置いてくれ・・・』

『そう言つて貰つたメディア・カードも全部スコットに渡した。』

『分かりました。パスワードは?・・・』

『決めてくれ・・・後で携帯に送ってな?・・・』

『了解です・・・携帯端末のアドレスは?・・・』

『このワーク・アドレスとはリンクさせてないが・・・』

『社内や取引先で先輩の携帯アドレスを知っている人は?・・・』

『お前も含めて何人かいるけどね・・・』

『なら携帯のアドレスも換えた方が良いでしょうよ・・・同じものにしますか?・・・』

『いや、新しいアドレスの最初と最後の二文字だけを換えて、リンクさせておいてくれ・・・』

『そう言つて携帯端末も取り出して手渡した。』

『パスワードは同じで良いよ。この携帯のSWカテゴリーに、この携帯のアドレスを知っている人が入っているから、同じ文面でアドレス変更通知を送信してくれるか?・・・』

『了解です』 『どのくらいでできる?』 『20分です』

『解つた・・・頼む』 『仕事はどうなってる?』

『今日やるべきような事は、もうないですね。それよりもニューズ・メディア12社からこのデスクに通話がありましたよ・・・』 『どうした?』

『取り敢えず全部広報に廻しましたけど・・・』

『そうか・・・ありがとう・・・すまんな・・・それじゃこのデスクとの通話サブルーチンに、ニュース・メディアを名乗る通話は自動で広報につながるようなプロトコルを加えてくれるか?・・・それとレコード・メツセージにもそう言う一文を頼むよ・・・』

『お安い御用ですよ・・・それで今日はどうします?・・・』

『・・・そうだな・・・今日と明日いっぱいはこちらでやらなきゃならないことはないな・・・』

『帰つても良いんじゃないんですか?・・・休暇を取って・・・』

3Dモニターから眼を離さず、パネルの上で指を走らせながら話している。私はその後ろでソファに腰を降ろした。

『・・・昼飯を食うまでにチーフに連絡するよ・・・終わったら自分のデスクに戻ってくれ・・・ありがとう。昼まではここにいますから・・・』

『分かりました。もう少しで終わりますから・・・』

私は座ったまま伸びをしてさり気なく周りを見回した。こちらを気にしているような同僚はいないようだ。気を遣ってくれているな・・・。

不意に私の携帯にコールが入った。

『どうぞ。まだ手を付けていませんから・・・』と言って手渡してくれる。

『悪いな・・・』と受け取って繋いだ。相手は先程のエリック・カンドルだった。

『突然すまない。今はどこにいる?・・・』

『オフィスにいますよ・・・』 『仕事中心か?・・・』

『いえ・・・スコットが手伝ってくれていたので、私のやる事は暫らくはありません』

『そうか・・・実はまた事態が急転してな・・・またもう少し付き合っ
て欲しいんだが・・・』

『良いですよ・・・どうしたんですか?・・・』

『いきなりですまんが記者会見を開くから、出てくれ』

『はい!?!』

これにはかなり驚かされた。

『メディアの取材攻勢がすごくてな・受け流し切れなくなってきた・社長も含めて取締役員のほぼ全員の耳に入っているし、大口投資家やウチのメインバンクからも問合せが入ってな・形だけでも公式発表をやって切り上げるよ・』

『分かりました。いつですか?』

『午後イチでやろうと言ったんだが、昼飯前で押し切られてな・11時から始める・10時から何か軽くつまみながら打ち合わせしよう・さつき話した応接ラウンジで良いか?』

『良いですよ・分かりました』 『・じゃ、その時にな・』

『はい・』

通話を終えて、また携帯をスコットに手渡す。

『・どうしました?』 『会見を開くとき・』

『ええ!』 『型通りの公式発表だって言ってたけど、荒れるかもな・』

『いつです?』 『昼飯前だと・』 『そりゃキツイすね・』

『1人で?』 『まさか・最低でもチーフと、もう1人は付くだろ・』

『・それじゃ、その会見が終わったら直帰ですね?』

そう言って携帯を手渡してくれた。

『・・・そうするよ・終わったのか?』

『・終わりました・パスワードは、僕からのメッセージャーに入ってます・』

『・ありがとう、助かったよ・もう戻ってくれ・私も、あと少ししたらまた5階に上がるから・』

『・分かりました・ファイルは、見れば判るようになってますから・』

『・本当にありがとう・これからも宜しく頼むよ・』

『・・・こんなのお安い御用ですよ・またいつでも声を掛けて下さい・』

いつもの笑顔を見せてスコットは立ち上がった。

『・・・ああ、今度奢るよ・・・』

私の最後の言葉に直接には応えず、左手でのサムズアップを笑顔でキメて自分のデスクに戻った。

私はデスクの傍には立ったが席には着かずにファイルやら資料やらをザツと見渡して確認した。相変わらずスコットはきれいに、判りやすく機能的にまとめてくれる。

デスクのライトを消してバッグを取ると、スコットには上に行くからと右手で合図してオフィスを出た。

エレベーターに乗って5階で降りる。応接ラウンジでは三つほどボックスシートが使われていたが、先刻エリック・カンドル等と話したシートは使われていなかったので、同じボックスの先刻と同じシートに座った。

バッグを開けてリストを出した。500人の女優やら様々な分野・方面での女性タレントやモデル、ヴォーカリストが載っている。

そうは言っても画像と名前と年齢の他には、データコードがプリントされているだけだ。

どうやら彼女達の詳細な個人データは、このデータコードでサイバスペースからダウンロードできるらしい。

プリント・リストの最後の行に、URLアドレス・コードがあったので、私は携帯端末を取り出してそのコードを打込んでブラウズさせ、彼女達全員の詳細な個人データをダウンロードした。ダウンロードには2分ほど掛かった。

2人、3人と読み進めていったが、ふと思いついて私は、芸能的な学歴・経歴・経験・業績・スキルとは直接的に関係の無い個人データを分離するようセットアップして実行させた。

データの分離が終わるまでに1分ほど掛かった。改めて読み直そうとしたが、何人かの話声と靴音が聴こえて来たのでファイルを保存して閉じ、携帯端末をポケットに仕舞った。

ほぼ同時にエリック・カンドルが4人の男を連れて入ってきた。私は立ち上がって迎えた。

その中の1人を見た時、自分が緊張するのを感じた。

4人の中の2人とは、さつき会った。宣伝部のアグシン・メーデーエフと広報部のマスード・カーンだ。

「おつ、度々すまないな・・・」 「・・・いえ、大丈夫です・・・」

「・・・ちよつと待ってくれ・・・」

そう言つてエリック・カンドルは、アグシン・メーデーエフとマスード・カーンを伴つてディスプレイコーナーに入った。残りの2人は、真つ直ぐこちらのボックスに入つてきた。

ハーマン・パーカー常務・・・42才・常務の中では最も若い・・・現在の営業本部長でもある。

私と握手を交わした時に人懐こそうな笑顔を見せた。

「・・・まずは、おめでどうと言わせて下さい・・・頑張つて下さいね・・・初顔合わせなので、紹介しましょう・・・営業本部次長でファースト・ディレクターでもある、ミスター・ジェア・インザー・・・」

「・・・よろしく・・・」 「・・・よろしく願ひします・・・」 握手を交わして席に着いた。

「・・・もう挨拶は終わったようだな・・・」

エリック・カンドルがあとの2人と共につまみを持って入つてきた。

つまみは中皿2枚に8種類のオードブル盛り合わせ・・・メーデーエフはコーヒーポッドと紙コップを・・・カーンはオレンジジュースとジンジャーエールのピッチャーを持っていた。

「・・・まあ、慌ただしくて申し訳ないんだが・・・昼飯前には終わるからな・・・」と、カンドル。

そう言いながら中皿をテーブルに置くと、メーデーエフから紙コップを貰つて配った。

少し疲れた様子で座るとオードブルを一つまみ口に放り込んだ。

「・・・常務は知っているな?・・・お前と役員会を直接につなぐパイプ役として、さつきの緊急役員会で選任された・・・ミスター・インザーは、その補佐を務められる・・・」

「・・・改めてよろしく頼む・・・」　そう言いながらインザー氏も一緒にメディアカードをくれた。

「・・・会見は11時から10階のホールで始めるが、長くても30分で必ず終わる・・・出るのはお前と常務と私の3人だ・・・司会は私が務める・・・こちらから伝えるのは、事実と基本的な方針・姿勢だけで、お前の心情や考えている事などについては、質疑応答の時に簡潔に答えれば良い・・・大丈夫だとは思いますが、あまりベラベラ喋るなよ・・・お前の中で、もう決めていることがあっても、答えたくなければ答えなくて良いからな・・・」

そう言いながらニヤリと笑うと、またオードブルを一つまみ口に放り込んでコーヒーを飲み干した。

「・・・気楽に構えていれば良いからな・・・」　「・・・分かりました・・・」

続いて常務が口を開いた。

「・・・実際に大会が始まるまでには、色々な打ち合わせやら話し合いやら催しもあるでしょうが、誰からどのような話があつたかについては、面倒だとは思いますが、フロア・ファーストチーフにも私にも、同じレポートを上げて下さい・・・」　『・・・了解しました・・・』

『・・・ところでアドルさん・・・どのタイプの艦を選びますか・・・？』と、常務が訊いた。

『・・・そうですね・・・軽巡宙艦を選ぶうと思っています・・・』

『・・・ほう・・・重巡宙艦と比べると・・・火力がかなり劣りますが・・・差し支えなければ、理由を教えてくださいませんか・・・？・・・』

『・・・確かにそうですね・・・私は火力よりも機動力と操艦技術で戦いたいと思っていますので・・・』

『・・・戦場となる空間は、デプリが多いと聞いていますので・・・ゲリラ戦を展開するつもりですか・・・？』

『・・・結果的にはそうなると思います・・・重巡ではダツシュも小回りも利きませんからね・・・』

『・・・なるほど・・・分かりました・・・軽巡ならクルーは50人ちよつ

とですね・・・人選はあなたが・・・?・・・』

『・・・はい・・・500人ほどからなるクルー候補者リストを貰っていますので、その中から・・・』』

『・・・そうですか・・・分かりました・・・』』

『・・・さっきの話の中でも言ったが、社として行うお前に対してのケア・マネジメントの方針に変わりはないからな・・・会見で訊かれれば答えるが、こちらからベラベラ喋るつもりはない・・・』』

エリック・カンドルがまたつまみを口に入れてオレンジジュースを飲んでから、確認するように言った。『・・・分かりました・・・』』

少し改まった調子で常務が後を引き取り、口を開く。

『・・・会見では、先ず私から概要を説明します・・・その後捕捉があればファーストチーフからお願いします・・・その後質疑応答に入って、終了と言う流れですね・・・』』

『・・・分かりました・・・』』

『・・・それじゃあ、会見前の打ち合わせとしてはこれで良いですかね?・・・』と、エリック。

『・・・そうですね。では10時50分にホール脇の控室で・・・』と、ハーマン・パーカー。

彼が立ち上がったので、1秒遅れて全員が立ち上がった。

応接ラウンジからの出掛けにエリックから呼び止められた。

『・・・会見までどうするんだ? ああ、オードブルか? ウチのチームの昼飯になるから心配ないよ・・・』』

『・・・控室で一服していますよ・・・そんなに時間も無いですし・・・』』

『・・・すぐに終るから気楽にしてろ・・・』 『ありがとうございます・・・』』

『・・・終わったらすぐに帰れ・・・明日は休んで良いから・・・』』

『・・・分かりました・・・』 『・・・気楽にな・・・』』

左肩を軽く叩いて、左に行った・・・腕のクロノ・メーターを見ると、もう10:35 だ・・・何をする時間もない・・・10階に上がることにした・・・通常のエレベーターはマスコミの関係者なんかで一杯だろうから・・・役員専用のエレベーターに乗った・・・10階で降りる

と直ぐに控室に入った・・・ドリンクディスプレイにコーヒーを出させると・・・奥の席に座った・・・灰皿を用意して最初の一本に火を点けた・・・コーヒーを飲みながら携帯端末を取り出し・・・先刻の話し合いの前に、クルー候補者たちの芸能的な学歴・経歴・経験・業績スキルとは直接的に関係の無い個人データを分離して保存したファイルを呼び出して開いた。なかなか興味深い経歴やスキルの持ち主がいるものだ・・・。

煙草を揉み消し8人目の個人ファイルを読み始めて3分程したぐらいで、控室のドアがノックされた。ファイルを閉じてクロノ・メーターを見ると、10:48 だった。

「・・・どうぞ・・・」と、応えて立ち上がる。

ドアを開いたのは30代後半のように見える男で、続いて20代前半のように見える女性も入って来た。

「・・・アドルさんですか・・・?・・・」 「・・・そうですが・・・」

「・・・初めまして・・・私はホール・ディレクターのアラムス・イエルチェン・・・こちらは、フロア・マネージャーのサリー・ランドです・・・今日は宜しくお願い致します・・・10:55になりましたら、舞台上に用意しました席に着席してください・・・それと、今回はおめでとうございます・・・頑張ってください・・・応援していますので・・・」

「・・・ありがとうございます・・・」

「・・・初めまして・・・サリー・ランドです・・・私も応援しています・・・頑張ってください・・・後で・・・サインをお願いしますか・・・?・・・」

「・・・ありがとうございます・・・良いですよ・・・」 「・・・!ありがとうございます・・・」

嬉しそうな表情を見せて、出て行った。

記者会見

ほぼ入れ替わりでエリック・カンドルがドアを開けた。

「・・・おう、いたか・・・準備は出来た・・・行くぞ・・・」

「・・・分かりました・・・」そう応えて、一緒に控室から出た・・・。

廊下を少し歩いて、舞台の外（そで）に入る・・・舞台の後方左側には、会議室にあるようなテーブルにパイプ椅子が三つ用意されている・・・舞台の中央前面には、小振りな演台が据えられていた・・・『・・・発表会かよ・・・』私は心中で独り言ちて、パイプ椅子に座った。

ホールの中は見えないが、大分騒めいているのは判る・・・。

席に着いて2分ほどしてハーマン・パーカー常務が舞台外（そで）に入ってきた。

私とエリック・カンドルは立ち上がったが、常務は座るように合図した・・・笑顔を見せて頷いたので、私も会釈して座り直した・・・。

「・・・宜しくお願いします・・・私は演台の方で・・・」エリック・カンドルはそう告げて一礼すると、舞台に出て演台の前に立った・・・数秒して、カーテンが左右に開き始めた。

凄まじいストロボの閃光が連続して浴びせられ、エリック・カンドルは思わず藪睨みになったが、何とかにこやかな笑顔を作る：凄い：カメラの砲列が幾つあるのか分からない：60：いや80はある：ライヴカメラの数も凄い・・・40はある・・・。

「・・・こんにちは・・・本日はお忙しい中、弊社にようこそおいで頂きました・・・私は今回の会見で、司会を務めさせて頂きます、エリック・カンドルと申します・・・宜しく致します・・・それでは、弊社常務取締役のハーマン・パーカー営業本部長より、概略を説明致します・・・」

そう言つてエリック・カンドルは舞台の外に退がり、入れ替わりにハーマン・パーカー常務が演台の前に立った・・・。

「・・・皆さん、こんにちは・・・ようこそおいで頂きました・・・ハーマン・パーカーです・・・今回は、弊社の営業社員が『サバイバル・スペースバトルシップ』の出場者募集に応募し、当選致しました事を受けての、

会見であります．．．それでは、本人を紹介する前に．．．私から概略を申し上げます．．．弊社営業第二課のルテナント・オフィサーであります．．．アドル・エルク氏が当選致しました．．．彼は現在38才で、弊社勤続17年になります、非常に有能・有力な戦力であります．．．それでは、ここでご紹介しましょう．．．アドル・エルク氏です．．．」そう言つて彼は私を見、左手を上げて舞台に出るよう私を招いた．．．

私は立ち上がり、居住まいを正して舞台に出た．．．

先程よりも遙かに激しい閃光の奔流が湧き起こった．．．とても客席の方を見られない．．．何とか演台に辿り着くと、パーカー常務の左隣に立つ．．．常務も前方を見られないようだった．．．左手で眼を庇うようにして待っていると、30秒ほどで落ち着いてきたので腕を降ろして真つ直ぐ前を見た．．．。

スチール・カメラマンとライヴ・カメラマンと記者の数が凄い．．．数えられない．．．。エリック・カンドルが舞台の右端でハンド・マイクを持って立った．．．。

「．．．それでは、ここからは質疑応答の時間とさせて頂きます．．．質問のある方は、挙手をお願い致します．．．A7の方．．．」

「．．．セントラル・ニュース・ネットワークのルデイ・ヴィーナーです：先ず．．．当選した事が判つた時のお気持ちを教えて下さい．．．」

「．．．それはもう．．．驚きました．．．まさか、当選するとは思っていませんでしたから．．．」

「．．．どうして、この『サバイバル・スペースバトルシップ』に、応募しようと思つたのですか．．．?．．．」

「．．．私は、このようなバーチャル体感システムでのゲーム大会が好きでして．．．この3年間に開催された．．．主だった大会には応募していませんね．．．勿論全部外れましたけど．．．その流れで、この大会にも応募していました．．．」

「．．．はい！ 次の方、どうぞ！ B 12の方．．．」

「．．．グローバル・ニュース・ネットワークのスキート・オーティスです．．．選ばれる艦種は、何にするのですか．．．?．．．」

「．．．軽巡洋艦にしようと考えています．．．」 「．．．その理由は．．．

「・・・」

「・・・ヒット・アンド・アウェイで戦つていこうと考えているからです：ゲーム・フィールドが、デブリや岩塊や障害物の多い空間として設定されているのも：理由の一つです：ヒット・アンド・アウェイで：ゲリラ戦を展開する事にも：なるだろうかとも思います・・・」

「・・・はい！ 次の方、どうぞ！ C 27の方・・・」

「・・・ホット・ニュース・ステーションのモリー・ヴァッシーです：応募されたことを、奥様には伝えていましたか・・・？」

「・・・いや・・・この3年間・・・色々な大会に応募してまして・・・2年目ぐらいの頃までは・・・伝えた事もありましたが、今回の大会については、伝えていませんでした・・・」

「・・・当選された事を奥様に伝えられた時・・・奥様は何と仰られましたか・・・？」

「・・・先ず・・・応募した事を伝えていませんでしたので・・・その事については、言われましたね・・・あとは・・・身体には気を付けて、無理にならない範囲でやつて欲しい・・・と言うような感じでしたね・・・」

「・・・はい！ 次の方、どうぞ！ D 11の方・・・」

「・・・ハイパー・ニュース・サービスのニコール・ユンジンです・・・搭乗される艦のクルーとなるメンバーの選抜は、終わりましたか・・・？」

「・・・まだ、始めてもいません・・・」

「・・・運営サイドから、クルー候補者のリストは、送られましたか・・・？」

「・・・はい・・・それは、届けられました・・・」 「・・・何人のリストでしたか・・・？」

「・・・500人ほどのリストでした・・・」 「・・・はい！ 次の方、どうぞ！ E 23の方・・・」

「・・・データ・ストリーム・ネットのマイロ・オーサーです・・・パーカー常務にお訊きしますが・・・今回、御社はアドル・エルク氏に対して・・・どのようにサポートされるのでしょうか・・・？」

「・・・はい・・・現状で、取敢えずと言う事にはなりますが・・・番組の収

「・・・はい！ 次の方、どうぞ！ H 57の方・・・」

「・・・セントラル・ネット・ストリームのカミール・キートンです・・・参加されるに当たつての意気込みをお願いします・・・」

「・・・まあ・・・初めて参加する大会ですので・・・思い切り楽しみたいと思つています・・・」

「・・・勝算は・・・どのように考えていますか・・・？・・・」

「・・・そうですね・・・無理はしないで・・・熱くならないで・・・その日その日を生き延びられるように・・・頑張りたいと思います・・・」

そこまで話したところで、ハーマン・パーカー常務が私とマイクの間に割つて入つた。

「・・・はい、それではそろそろ質問も出尽くしたように見えますし・・・まだ始まつたばかりでもありますので・・・今日の会見はこれで切り上げさせて頂きたいと思ひます・・・ゲーム大会が実際に開始されれば・・・また皆さんにお話できる事も・・・判つてくるかとも思ひます・・・ですので、それまで見守つて頂ければ、幸甚に思ひます・・・今日はお疲れ様でした・・・お気を付けて、お帰り下さい・・・昼食がまだでしたら、どうぞ、ラウンジにて召し上がつて行つて下さい・・・どうも、ありがとうございます・・・」

そこまで言つてパーカー常務は私を誘つて後ろに退がつた・・・直ぐにカーテンが左右から閉まり・・・舞台と観客席とを隔てた・・・観客席からは会見の続行を求める声が暫く聴こえていたが・・・エリック・カンドルが宥めて誘う声が聴こえ始めると・・・それも治まつていった・・・

「・・・常務・・・これで良かったんでしょうか・・・？・・・」

「・・・はい？ ええ、上出来ですよ・・・マスコミ対応なんて、こんなものですよ・・・お疲れ様でした、アドルさん・・・良ければお昼を、フロア・ファースト・チーフも一緒に如何ですか・・・？・・・」 「・・・ありがとうございます・・・一緒に過ごさせて頂きます・・・」

終つてみればあつと言う間だった・・・こんなものかとも思つた・・・緊張が解けてほつとしたのと・・・あつけに取られたような感覚を、同時に感じていた・・・。

記者会見後の昼食会とその後・・・

それから約20分後・・・私は9階のスカイ・ラウンジで・・・ハーマン・バーカー常務と、エリック・カンドル・フロア・ファースト・チーフと共に・・・昼食の卓を囲んでいた。

9階のスカイ・ラウンジに入った事は、これまでに3回あったが昼食の席に着いた事は無かった・・・。

気が抜けたような感覚がまだ残っている・・・目の前にはジンジャーエールの注がれたグラスがあった・・・今気が付いたかのように手に取って、二口飲んだ・・・。

右手側にパーカー常務が座っていて、左手側にエリック・カンドルが座っていた・・・。

高級そうで面倒臭そうなランチ・メニューが多かったが、一番食べ易そうな定食風のランチを頼んだ・・・常務はハーフ・ボトルのロゼ・ワインを頼んで、私達にも勧めたが私は車で帰宅するからと辞退した・・・。

「・・・アドルさん・・・今日はお疲れ様でした・・・ご苦労様でした・・・これでマスコミも・・・役員会や大口株主の方々も、暫くは静かにしてくるでしょう・・・しかし、このゲーム大会に関わる事が、これ程の反応を引き出す事になるとは・・・予想外でしたね・・・」

「・・・全くですね・・・」
エリック・カンドルもそう応じてライト・ビールのグラスに口を着けた・・・。

「・・・ところでアドルさん・・・運営本部に公開を許可したのは、どこまでだったのですか・・・?・・・」 「・・・顔と名前と年齢だけです・・・」 「・・・なるほど・・・ですがそれから僅か数時間で、勤務先、ワークアドレス、パーソナルアドレスも割れましたね・・・もう貴方の今の住所も・・・ご家族の住所も探り出されているでしょう・・・今日の会見は社としての会見でしたので・・・個人情報公開について、釘を刺すと言う事は・・・敢えて言及しませんでしたが、今後アドルさんの個人情報次々と晒されるようでしたら・・・また対応を考えないといけなくなります

ね・・・」

「・・・そうですね・・・」

「・・・まあ、そのような事態になっても・・・社として適宜・適切にサポートさせて頂きますので・・・心配しないで下さいね・・・」

「・・・分かりました・・・宜しく願います・・・」

「・・・今日は、これから直帰ですか・・・?・・・」 「・・・はい・・・」

「・・・気を付けて帰って下さい・・・奥様に連絡を執られて・・・様子を訊いてあげた方が良いと思いますね・・・要望とか報告とか連絡とか・・・直接、私やファースト・チーフに通話を繋いでくれても構わないのですけれども・・・スケジュールのすれ違いになる可能性もありますので・・・どうでしょうね、チーフ・カンデル・・・?・・・秘書室から誰か：アドルさんに付いて貰いましょうか・・・?・・・」

「・・・そうですね・・・そうして頂ける方が、時間の節約と言いますか：タイム・ロスの防止には・・・なると思いますね・・・」

「・・・いや、そんな・・・私の為に秘書室の方の手を煩わせてしまうのは・・・」

「・・・いや、アドルさん・・・社として貴方のバックアップを全面的に展開して行うには・・・必要な人員配置と思います・・・秘書室のチーフには私から今日中に話をしますので・・・一両日中には、アドルさん専任の副官と言いますか・・・セクレタリイが決まるでしょう・・・」

「・・・分かりました・・・」 「・・・じゃあ、頂きましょう・・・冷めちやいますから・・・」

それから暫くは3人とも無言で、昼食に取り掛かった・・・。

それから30分後・・・3人ともデザートのプディングまで食べ終わって、コーヒーを飲んでいた・・・。

「・・・アドルさん・・・土曜日は、何時に行かれるのですか・・・?・・・」

「・・・出来るだけ早朝から行くこうと思っています・・・」

「・・・そうですね・・・報告書のフォーマットは、後程チーフからでも渡るようになりますので・・・宜しく願います・・・」 「・・・分かりました・・・」

「・・・それでは、今日はここまで、と言う事で・・・」

常務の言葉を受けて3人ともナプキンで口を拭うと、立ち上がった。。

もう昼休みは終わっていたので、自分の職場のフロアまで降りた私は、フロア・チーフに午後から帰る旨を伝えた。同僚たちは私と顔を合わせると、劳いの言葉を掛けてくれた。最後に自分のデスクに寄ると、グラハム・スコットは自分のデスクで仕事をしていたが、直ぐに立って来てくれた。。

「..お疲れ様です..堂々と話してましたね..」

「..ライヴで中継していたのか...?..」やれやれと言った感じで言うと..、

「..そりゃあ、お昼でしたからね..帰るんですよ...?..?..」

「..ああ..明日も休もうかなって感じもしてるけどな..」

「..良いんじゃないんですか..明日いっぱいは何もしなくても良いぐらいには進めておきましたから..」

「..本当にありがとうな..感謝してるよ..」

「..良いんですよ..いつもお世話になってますから..」

「..うん..やっぱり明日も休むわ..チーフにそう言ってから帰る..何かあったらデスクにメモでも残して置いてくれ..じゃあ、お疲れさん..お先に..」

「..お疲れ様でした..気を付けて..」

最後に左手を挙げて合図すると、もう一度フロア・チーフに声を掛けて1階に降りた..。

1階のカフェテリアでコーヒーを飲みながら一服してから帰ろうかと思って、軽く中を覗いて見たが..マスコミ関係者のように観える人はいないようだった..。

もしもいたら面倒な事になるかな、と思って入り口の辺りで迷っている、顔見知りのウエイトレスと眼が合ったので、ハンドサインで《..マスコミの人はいる...?..》と訊くと《..いない..》らしいので、入った。

いつも座る席に座って、シナモン・コーヒーを頼んだ..。

灰皿を引き寄せて一服点ける..半分ほど灰にしたぐらいでコー

ヒーが来た・・・。

カップを半分ほど空にしたぐらいで、一本を灰皿で揉み潰す・・・シナモンの香りと共に残りのコーヒーの味と香りを楽しんでいると、人の気配に気付いた（まさか・・・）。

「・・・すみません・・・相席してもよろしいでしょうか・・・？」

（・・・うつ・・・やっぱり・・・）「・・・あ・・・はい・・・ええ・・・どうぞ・・・」

「・・・ありがとうございます・・・アドル・エルクさん・・・」

「・・・記者さんですか・・・？・・・会場にいらつしやいましたか・・・？」

「・・・ええ・・・いしましたが、座っていたのはずっと後ろの席でした・・・初めまして・・・モリー・イーノスと申します・・・フリー・ライターをしています・・・」

そう言いながら自分のメディア・カードを私の目の前に置いたが、私は視線を左に逸らしたままだった・・・。

「・・・宜しければ・・・少しお話を伺いたいのですが・・・」

「・・・私への取材でしたら、会社の広報部に訊いて下さい・・・私自身が個人としてお話す事も、質問に答える事も許可されておりませんので・・・」

そう答えてバッグを手に取り立ち上がって出て行こうとしたが、次に発せられた彼女の言葉に、思わず足を止めてその時に初めて彼女の顔を見た・・・。

「・・・勝ちたくないですか、アドルさん・・・？・・・私は貴方を勝たせる事の出来る情報を持っています・・・」

・・・モリー・イーノス・・・年の頃は24・5才だろうか・・・？・・・若手の女優かタレントと言っても十分に通用するような美人だ・・・ライト・ブラウンに少しカーマインが入ったような色の、ナチュラルにカールさせたセミロングの髪だったが・・・意志の強さを感じさせる眼が、真っ直ぐ私の顔を見据えている・・・。

「・・・どう言う事ですか、それは・・・？・・・」

「・・・まあ座って下さい・・・それとも、奥の席に移りましょうか・・・？」

「・・・いや、ここは会社の中なのでこれ以上はマズいです・・・後程私から連絡します・・・」

それだけ言うと、彼女が先程テーブルに置いたメディア・カードを手に取り、バッグを抱えて急いで外に出た・・・。

そのまま従業員の駐車スペースに入り、自分のエレカーに乗り込むと直ぐにスタートさせた・・・大通りに出て最初の大きい交差点の手前で、信号待ちの渋滞に捉まったので一息吐くと、胸ポケットに取り敢えず突っ込んでいた彼女のメディア・カードを取り出す・・・。

余白に手書きで何かが行書き付けてあったのでよく見ると、サイバースペースの中での個人用クラウド・データ格納庫のURLコードのようなものと、そこにアクセスして閲覧するためのパスコードのようなものだった・・・。

メディア・カードを胸ポケットに戻すと私は、渋滞で停車している間にナビの検索で近場の端末ショップを見付け、ロックしてコースを設定した・・・。

ショップで買ったのは、使い捨ての安い携帯端末だ・・・すぐその端末でデータ格納庫にアクセスする・・・データ・カテゴリーの中に『待ち合わせ場所』があつたので閲覧すると、私が月に2回ほど休日に訪れる小さいカフェの名前と住所と電話番号があつた・・・。

何か見張られているような感覚を覚えて思わず周りを小さく見渡してしまつたが、そのカフェの記事に『A・E・・・2時間後に』とだけコメントすると、総てを閉じて端末の電源も切つて帰路に就いた・・・。

帰宅するとシャワーを浴び、下着姿のままジンジャーエールの瓶を取り出すと、一息で半分ほど呑んでから、ソファに深く座つた・・・。クロノ・メーターを見遣ると、出るなら20分後ぐらいまでには出ないと待ち合わせ時間に間に合わなくなる時刻だった・・・。

私は立ち上がって身支度を整えると、先程購入した端末と普段使っている端末と、普段は使っていない端末の3つをバッグに入れ、そのまま携えて部屋を出た・・・。